

竜浮淵のはなし



竜浮淵のはなし

土岐川は永保寺の下で、どんと虎溪山にぶつつかって、流れの向きを変えるやろ。山は絶壁で、川は渦を巻いて淵をつくつとる。あそこが竜浮淵や。

今はそんなこともないが、わしらの子どものじぶんには、昼間でも暗いほどに木が茂つとつての、岩にはこけがはえて、うっかり足場をまちがえると、すべつて、まっさかさまに淵へ落ちこみそうやった。上から見ると、水はくらく、渦は消えてはおこり、巻いては消えておそろしかった。そうやから、淵の深い底には竜がおるちゆうて、あんまりそばへ行かなんだ。

むかし、このへんが長瀬村とよばれとつたころ、いや、それよりもつとむかしかな。

そのころは、嫁入りとか、そうしきとか、そういうとき、客に出すお膳や、お椀などは、どのうちにもあるというもんやなかつた。高いもので、なかなか買えななで、入用のときはどこか物もちのうちにあるのを、べこべこ頭さげて借りたもんや。貧乏なものはお礼もできんから借りることもできなんだやろうな。とにかく、だいいじなものやった。

ところが、長瀬村のもんはそれにふじゆうはしななだ。

あした、何人分かの膳椀がいるというと、その家のものは、紙に「何兵衛の家で嫁入りがあります。どうぞ何人分の膳椀をお貸しくだされ」と書いて、竜浮淵の川上から流す。そうすると、

翌朝、あの淵の岸に、ちゃんとその人数だけの膳椀がそろえて置いたつた。

いつのころから、どうしてそうなつとつたかしらんが、みんなは、あの淵に竜様がすんでおられて、村のものをたすけてくださると、ありがたがつておつた。

むかしのもんは、義理がたかつたでな、借りたものは、かならず、きれいに洗つて、また淵の岸へ返した。竜様が何を食べられるかしらんが、お礼のしるしにと、畑のものなどもそえて岸にならべ、見えぬ竜様へお礼をいった。

だれもがみんな、いつまでもそんな気もちでおつたら、今でも借りられたこつちやろうな。ところが一人だけ悪いやつがおつた。

その男も、あるとき、竜様にたのんで、膳椀を貸してもらつた。

用がすんで、そのお膳や、お椀を洗いながら、男はふと手をやすめた。

「ありがたいことや、こんなりつばな道具が借りられて……」と思ひながら、よう見れば、膳としい、椀としい、うるしの色つや、金のもよりのあざやかさ、見れば見るほどけつこうなものやつた。できるなら、こういうもののひとつくらいうちにはほしい、と思つたにちがいない。

「おれはきのう二十人分借りた。その前に太郎兵衛は三十人分借りた。小田の作一はもつと客が多かつたで数もあつたやろう。むかしからみんなが借りて使つとる。してみりや、あの淵にはいくらでもあるのやろう。」

そう考えたなら、一人分や二人分、返さずにおいてもかまうまい、という気がしたのやろうな。その男は、借りたものの中で、とりわけ塗りや絵がらのよいのをひとつだけ残し、あとを淵へ返した。

小さな村で、近所の人や、親せきをよんでごちそうをふるまうほどのことが、そう毎日あるわけではない。悪い男が、ひとつかくして持っていることが、すぐには知れず月日がたった。

ある日、一けんの家でそうしきを出すことになり、その家のものはさっそく竜浮淵に出かけた。「どうぞ竜神様、お願いします。」

と、手をあわせておがみ、紙を流して、翌朝岸へ行つたが何も無い。

さあ、それからがひとさわぎやった。その家のものなんぎはともかく、今まで一度も願ひのきいてもらえなかったことがないだけに、その家中の心がけが悪いと、村のものがぞめた。

ところが、そのつぎに頼みに行つたものも手ふらで帰ってきた。その後のものも、その後も、みんな、がっかりした顔で帰ってきた。

人の一生の中で、嫁入りとか、そうしきとかはだいいじなことで、そういうだいいじなとき使うものが、無いからといって、急によそでまにあわせることもできんで、みんなはこまった。

いったい、いつ、だれるときから借りられんようになったか、村のおもだったのがよってせんぎした。だれかが竜神様をおこらせたのではないか、というろせんぎするうちに、とうとうあ

の男がひとつだけ返さずにおつたことがわかった。

村中のものから、ののしられた男は、長瀬村を追い出されて、どっか遠いところへ行つたげな。

しかし、その後で村のものが竜浮淵の岸へ行つて、姿の見えぬ竜神様に手をついておわびをしたが、もう二度と、あのりっぱな膳椀を貸してくれなんだと。

宮坂 久仁夫